週刊ダイヤモンド　名著再読
北村行伸
平成 19 年 6 月 18 日号

「陽気なドン・カミロ」

ジョヴァンニ・グァレスキ（著）、岡田眞吉（訳）
文藝春秋社　1953年9月20日刊

本書はイタリア人作家グァレスキが自ら編集長をしていた週刊誌『キャンディド』に連載した短編を集めて1948年に刊行したものである。その内容は北イタリアのある村の司祭ドン・カミロと共産主義者の村長ペポネとの対立を村の生活の様々な出来事の中でユーモアと辛辣な批判を交えながら描いた喜劇である。そこには、ファシズムに支配されていたイタリアとそれに対抗してレジスタンスを続けていた村人達の連帯感、戦後の冷戦の中での共産主義と教会に代表される保守主義との対立が色濃く出ている。

なぜ今『ドン・カミロ』なのだろうか。我が国と同じような経験を経て1947年に制定されたイタリア憲法では、第7条で「国家とカトリック教会とは、各々その固有の領域において、独立であり、最高である」と、教会の政治からの独立性が認められ、また第11条では「イタリア国は、多国民の自由を侵害する手段として、および国際紛争を解決する方法として、戦争を否認し、他国と互いに均しい条件の下に、諸国家の間に平和と正義とを確保する秩序にとって必要な主権の制限に同意し、この目的を有する国際組織を推進し、助成する」としている。言うまでもなくこれは日本国憲法第9条のイタリア版である。『ドン・カミロ』を読むと、イタリアの戦後憲法制定当時の社会的背景や対立の図式が読み取れる。

昨今、日本社会が格差社会やコミュニティ感覚の喪失によって、社会的な統制を失っているように見受けられる。それに対して『ドン・カミロ』ではなんとも言われぬコミュニティの実感、そしてお互いを許し合う心に溢れている。花田清輝は「坂口安吾の死」という追悼文で、安吾をドン・カミロに、自分をペポネにたとえ、イデオロギーでは対立を続けても、二人はレジスタンスの闘志としてお互いを認め合う仲であったことを告白している。他人の不幸への同情心を失ってしまえば、コミュニティでは無くなり、闘争心をむき出しにした仁義なき戦いに明け暮れることになる。もちろん、コミュニティ意識は人為的に作れるものではないし、まして政府が指導すべきものでもない。それは他人に対する関心を持ち続けることによって自然に生み出していくしかない。そのための手がかりを『ドン・カミロ』は与えてくれている。

ジュリアン・デュヴィヴィエ監督の映画『陽気なドン・カミロ』（1951年）とその続編の『ドン・カミロ頑張る』（1953年）はDVDで発売されている。こちらもお勧めしたい。